

いったものではない。今日では口語詩の金字塔であるかのように言われている「塵塚」は、川路柳虹にとって単なる試作でしかなかったことが知れる。

最初の三編「夏花」「壁の光」「沙上の光」に存在するのは、「闇」と「光」と「音」と「時（刹那）」によって、感覚表現された「生」と「我」と「真実」である。詩の前半に感覚表現を、後半に意味内容を盛り込むといった展開のさせかたをしている。このような川路柳虹の感覚重視の作品には、有名なものとして「暴風のあとの海岸」「感覚の瞬時」などがあり、それは偶然かも知れないが、秒刻みに生きる暗中模索の現代、今の時代に充分に当て嵌まるような詩的世界と思われる。

後半の二編「君が老ひて」「凋落」は、一転して口語詩ではあるが、以前の文語詩時代の甘いロマンチックな香りを醸し出している作品である。多少は明治四十年代の自然主義文芸思潮や社会情勢を反映してか、暗く頹廢的な面も尙うことが出来る。この二編は、表現としては単調で平易、感覚的なものは影を潜めており、詩的内容に重点を置いた作品と言えよう。

後半の二編に比べれば、最初の三編はとてつもなく明治後半とは思えない、現代に充分に通ずる新鮮な秀れた作品である。川路柳虹はこれ等の試作を経て、自らの口語自由詩を高いところへと引き上げていったと考えられる。

それにしても、明治四十年代の口語自由詩運動の先頭を行く詩壇の寵児であった川路柳虹が、なぜ奈良県にある小さな雑誌『敷島』

に、このような秀れた作品を投稿したのか、詳細なところはわからない。

君が老ひて

君が老ひて眠りに落ちたとき、
 爐の傍に黙れ、この本をとり落し、
 また拾ひ上げ、しづかに読み出すとき、
 嘗てみた柔らかな夢、この眼の影の深みを君は見る。

楽しい、美しい君の日を幾人か愛した、
 偽りにも眞にも幾人かその美さを愛でた、
 しかし、その一人は移りゆく心を愛でた。
 君の面變へるその悲しみを愛した。

火照つた扉の欄に凭りかゝり、
 さ、やくのは小さい聲、あ、『愛』は逃げた。
 この歩みは遠く山をこえて、
 美しい星のむれの中に面をかくした。

(エーツ)

凋落

淋しい冬の眠りのなかに、
 草の枯れた心に、
 落葉の胸に、
 騒いでゆく風よ。

林はすべてさびれ、
 鳥はその黒い姿をあらはす、
 床もない凍えた枝に。

お、去りゆくもの、憂ひよ、
 衰へよ、赤みざした夕日はさびしく
 その梢に笑ひを見せる、——その夢を、
 また、重い夜の嘆きを。

○

明治四十三年三月五日（第四卷二号）には、次の詩が掲載されて
 いる。

全体にあの「塵塚」のような醜悪さによる生の現実を凝視したと

血の音がはやい

死 死、死——死——死

青い壁が光る。

夢？

夢？

ぢやない、、、こうしてゐるんだ。

自分はこんな場所にこうしてゐるんだ。

闇黒な室内

たゞひとり『生』がめざめてゐる——

青い壁の光。

明治四十二年十月九日（第三卷8号）には、次の詩が掲載されている。

沙上の光

日中の光りが

ふりそそぐ、

輝いた

さびしや……

ゆき疲れた瞳は

長い岸を凝視める……

空と、

光りと、

沈んだ黙つた海と、

ただ胸に息づく『我』——

茫漠とした

沙原に、

一つの

希望がある。

沙の輝くとき、

陽炎の燃えるとき……

それは

寂しみの中に

かがやいてゐる

眞實の光りである。

明治四十三年一月十五日（第四卷一号）には、次の詩が掲載されている。

ここでしばしば『敷島』の巻頭を飾った川路柳虹の詩五編を掲載し、その鑑賞と詩の位置について考察してみたい。
 明治四十一年十一月九日（第二卷十一号）には、次の詩が掲載されている。

夏花

日
 疲れ——
 暗い夕方
 花の萎む色
 紫——よごれた紅——
 血の噎すえてゆく雫
 夏の夕方
 雛粟の萎むいろ——
 暮れてゆく煩みの光り
 光り

苑の草のしづかさ

明治四十二年一月十六日（第三卷一号）には、次の詩が掲載されている。

壁の光

闇ま黒くろな室内しつぱい
 時計の刻む音ね
 青い壁が光る、
 笑ふ 青い花がちる
 ××××××××また、く。
 影
 死——死、死、死、
 青い壁が光る
 刻一刻と時計がきざむ、
 闇黒な室内
 身を切る寂寥せきれう 反響こぼ、
 青い壁が光る、また、く、笑ふ、
 大きな血の滴りに滲じむ——真赤に！
 自分は戦慄せんりつした、瞳がどきく、する

である。

雑誌『敷島』は、現在の奈良県大和高田市内本町一の七番地中川俊一宅、当時の奈良県北葛城郡高田町大字五百九番屋敷の印刷業者中川八太郎を編集発行人としており、大きさは菊版、平均四十頁、毎月一回五日の発行日である。



この『敷島』については既に地元の『大和高田市史』（昭和三十三年四月）で紹介されている。研究調査としては明石利代の日本近

代文学館所蔵の九冊について、「岡山の文芸誌『白虹』を中心とする文学運動」（『大阪女子大文学』昭和四十九年二月）がある。また太田登の「地方文芸誌『敷島』について」（『立教大学日本文学』昭和五十一年二月）等もある。

その内容は創刊号の「発刊之辞」で知ることが出来るが、最初は少年雑誌として出された。だが、この少年雑誌としての懸賞作品による、作文、和歌、俳句等の試みは三号雑誌として廃刊することとなった。明治四十一年五月五日発行の二巻五号からは、近藤青洋、中村秋圃等が、同人、選者として活躍するようになる。その後の『敷島』の充実ぶりには目を見張るものがあり、明治四十一年十一月九日（二巻十一号）の巻頭は川路柳虹の詩によって飾られている。また、翌四十二年一月十六日（三巻一号）には、川路柳虹の詩のほか石川啄木や前田夕暮の短歌が掲載されている。そして同じ二月二十八日（三巻二号）では、石川啄木と百田千里（のちの民衆詩人百田宗治）の短歌が掲載されている。さらに同じ七月十日（三巻五号）では、巻頭の質問に対して、石川啄木、高浜長江、相馬御風、生田長江らの「余が地方雑誌に対する意見」という回答が寄せられており、また若山牧水の短歌も掲載されている。その他の投稿者として、服部嘉香、三富朽葉、正富汪洋、人見東明、加藤介春などの長詩、小品、評論などを見ることができる。

こうした充実したなかで『敷島』は明治四十四年一月発行の五巻一号で終刊の運びとなったのである。

川路柳虹と地方文芸雑誌

伊 藤 淑 人

口語詩の研究については、人見円吉の『口語詩の史的研究』（桜楓社）という大著があり、ここでは口語詩の出發を、古く『新体詩抄』の新体詩創出の思想の中から言文一致運動に及ぶまでに求め、明治四十一年頃までを纏めている。人見円吉の『口語詩の史的研究』では、明治四十一年を「口語詩の確立基盤」と定めている。この人見円吉の研究に異論を差し挟む気はないが、しかし一般的には口語自由詩運動は、自然主義の文芸思潮と相俟って明治四十年代に起きたものとされている。

その口語詩運動の嚆矢となったのが、作品では川路柳虹の「塵塚」であり、詩論では服部嘉香の「言文一致の詩」「詩歌に於ける現実生活の価値」、相馬御風「自ら欺ける詩界」「詩の根本的革新」等であろう。川路柳虹はそれ以前は雑誌『詩人』等を中心として、美しいロマンチックな文語詩を創作していた。だが突如明治四十年九月『詩人』（四号）に、斬新な内容と形式による口語詩「塵塚」を發表した。その「塵塚」とは、詩材を現実の醜悪なものに求め、うご

めく虫けら、蛾の卵、徳利のかけら、紙くずなどに求めた作品である。不潔で不快な「塵塚」の中に生きる者の苦しみ、現実を描いた。それは実に、文語詩の持つ優美、優雅さを捨て去り、口語のリアリティを生かす試みであった。詩とは、古来から優美で風雅なものという意識を逆転させ、口語の持つ強みをいかなく發揮させた作品と言える。形式は未だ七音五音が主流であるが、全体としては自由律として読むことも可能であろう。この詩をきっかけとして川路柳虹は、口語自由詩の創作に励むとともに、一躍詩壇の寵児となっていたのであった。

その口語自由詩の旗手川路柳虹が、奈良県に明治四十年十月十三日に創刊された雑誌『敷島』に詩を掲載しているのは興味深いこと